

しかし、個々の症例でみると、拡大後の最大・最小値にもみられるように、cross-bite が未だ改善されていないものや過拡大されたものがあり、個々の症例に応じた適切な拡大術式の検討の必要性が示唆された。

唇顎口蓋裂症例中にみられる外科的矯正治療の必要性

新潟大学歯学部 花田 晃治

唇顎口蓋裂患者に対する閉鎖手術によりその後の歯・顎・顔面の正常な成長過程が破壊され、永久歯が萌出してからの上顎歯列弓において著しい狭窄と個々の歯の位置異常を伴う咬合の異常を生じ、審美、咀嚼機能、発音機能上の障害を訴えるものが多い。

頭部X線規格写真の分析によれば、こうした患者の顎顔面頭蓋の特徴は、上顎骨の前後的、水平的、垂直的成長の異常による上顎骨の後退と狭窄であり、下顎骨の相対的な前突と後下方への成長による位置異常である。それに加えて、片側性唇顎口蓋裂患者では上顎歯列弓の左右非対称性が著しい。さらに手術部の歯の欠損、個々の歯の位置異常、傾斜捻転、などがほとんどの症例において認められる。

こうした複雑多岐にわたる歯・咬合の異常の治療については、まず個々の歯の異常程度の軽症のものについては矯正治療によって十分な改善をはかることができる。しかしながら上顎歯列弓の狭窄、上顎骨の後退、下顎骨の前突などの顎骨の異常を伴う症例においては、矯正治療と外科治療を併用しなければならない。すなわち外科的矯正治療を必要とする。

はじめに corticotomy について報告する。上顎歯列弓の著しい狭窄がある場合、従来は expansion screw のついた矯正装置による側方拡大により頬側移動をはかっていたが、この方法によると拡大は達成されるが、術後、口蓋部に存在する瘢痕組織に残る張力によって後戻りすることが多い。そこでこのような症例に corticotomy をまず行い、移動したい歯に相当する頬側、口蓋側の骨皮質の一部を線状に削除した後、矯正装置による側方拡大を行った結果、次のような利点のあることがわかった。矯正治療の単純化、矯正治療期間の短縮、患者の負担軽減、後戻り防止、歯の失活・歯根吸収・歯の削合などが無い。

次に後退している上顎骨と前突している下顎骨によって成り立っている骨格性下顎前突の治療には orthognathic surgery 外科的矯正治療が最も有効であることがわかった。まず個々の歯に矯正装置を接着した上で、術前矯正治療により上顎歯列弓の側方拡大、個々の歯の位置異常の改善、上下顎歯

列弓の leveling などを行った上で、上顎前歯部の osteotomy により上顎骨前方部を前進させた上で、下顎角部での osteotomy により下顎骨全体を後退させる。これらにより上唇部の陥凹感、下唇の突出感が改善され、審美的に満足できる顔貌をうることができ、加えて上下顎歯列弓の咬合関係の改善により咀嚼機能と言語機能に顕著な満足すべき結果をうることができることがわかった。

唇裂口蓋裂の歯科矯正治療時機について

昭和大学歯学部 柴崎 好伸

従来、唇裂口蓋裂の歯科矯正的アプローチには、統一的な思想が示されていたのではなく、矯正医がおのおの独自の時機と方法で行ってきた。その極端な例が、一方の連続観察システム (continuous monitoring) に対する晩期治療システム (delayed treatment) である。すなわち、前者は出生後4～5週からの術前顎矯正に始まり、青年期の真性下顎前突について行われる骨切り (osteotomy) に先立つ術前矯正まで各成長段階毎に計画された治療をいう。後者はこの徒に長い患者管理の反省に立つもので、全ての矯正的問題を18～19才で一挙に解決を計ろうとするものであるが、この治療の最大の欠点は既成の変形に対して不可逆的で治療に限界を生ずることである。

そこで最も時機をえた矯正治療とその患者管理はどうあるべきか、ということであるが、この問題を考える際に遵守すべき最重要事項は全治療過程を通じて過剰治療 (over treatment) を極力避けるということである。さらに患児は出生直後より多くの専門分野の治療が用意されており、しかもその大半が成長発育の早期に集中していることを考えれば、その種の不正が不可逆的でない限りその治療時期を遅らせるべきである。以上を勘案すると、最もよい治療時機とは現在のところ次のようになる。

Stage I 乳歯列期 (II A - II C; 約3～5才)

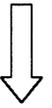
原則的には治療は行われない。crossbite が重篤で上下歯列弓が咬み合わない症例、言語治療士から要請のある症例は例外とする。

Stage II 混合歯列前期 (III A, 6～8才)

治療目標：不正咬合に起因する心理的障害からの開放・永久前歯の正しい排列と側方歯群 (乳歯列群) の側方拡大。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂患者に対する閉鎖手術によりその後の歯・顎・顔面の正常な成長過程が破壊され、永久歯が萌出してからの上顎歯列弓において著しい狭窄と個々の歯の位置異常を伴う咬合の異常を生じ、審美、咀嚼機能発音機能上の障害を訴えるものが多い。